



Title	現代医療のエスノグラフィー：医療・文化をめぐる関係性
Author(s)	中本, 剛二
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57868
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【12】

氏 名	なかもと こうじ
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 3 4 6 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	現代医療のエスノグラフィー—医療・文化をめぐる関係性—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 川村 邦光 (副査) 教 授 杉原 達 教 授 富山 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、現代医療に関わる諸領域でのフィールドワーク、およびエスノグラフィーの記述を通じて、現代医療にどのように向き合うことができるかを考察する。それとともに、現代医療に関するエスノグラフィーの記述自体が、医療従事者や病者、病気体験者の出会う臨床における文化的・社会的な困難にどのように関わることができるのか、臨床の場と研究が連携して対話することができるのか模索される。

序章では、医療に関連する文化人類学や社会学での先行研究において、現代医療が批判的に検討され、また様々な文化での多様な医療の実態が報告されて、現代医療の批判・相対化が行なわれているが、その必要性を認めつつも、医療の複雑化・高度化が進展するほど、文化的・社会的な側面との軋轢が増大している現状のなかで、フィールドワークから医療の現場での実践における様相を記述し続けることの必要性を指摘する。また、申請者自身の医療体験を記して、問題意識の所在を明らかにしている。

第 1 章、第 2 章では、病院内での医療従事者の実践、またその一端に参与したフィールドワークから、医療従事者の行為や認識が変化しうる可能性があることを述べる。第 1 章では、医療人類学や医療社会学の理論的枠組みを批判的に検討して、医療従事者と病者の間で、重なり合いつつも相違する病気や医療文化に対する行動や認識を捉える視点を提示する。そして、病院で多くの人が死を迎えている現在、死の医療化のプロセスで現われたターミナル・ケアをめぐる、医療従事者の間で自らの方法や対処する領域に対する問い直しされていることを明らかにしている。第 2 章では、「受け持ち制看護」を導入し、患者との関係性を変えようとする看護婦（現在、看護師）たちの活動が記されている。

第 3 章では、申請者が日本語を母語としない外国人の病者に同行して通訳を行なう、ボランティア団体「みのお外国人医療サポートネット」に参加し、文化的な背景の異なる病者が現われた場合、第三者としてボランティアが介入することによって、医療従事者と患

者の間で、これまで不問に付され慣習化されていた医療の現場が明らかにされている。第 4 章では、申請者が妻とともに関わった、いまだあまり社会的に認知されていない不育症が取り上げられる。流産・死産という経験また不育症という病気を受け止めていく人が、身近な他者や世間による抑圧を経験しながら、インターネットというメディアを介して、不育症の経験者との繋がり・交流が形成されていることが指摘される。

第 5 章では、病院において患者を迎える死、そして医療従事者によって担われる死後の処置に関して、病院内でのフィールドワークを通じて明らかにする。ある病院では、看護婦（看護師）が死者に洗浄や死化粧などの処置をした後、死の床から霊安室へと遺体に移され、「お帰り」専用の西門から遺族のもとへと帰っていくプロセスが記され、それは儀礼を通じて、死者が人格をもって家族という親密圏のなかに帰っていく、儀礼的な過程であることが指摘されている。終章では、現代医療をめぐるエスノグラフィーの記述が、医療従事者や外国人も含めた病者、病者の近親者、医療ボランティアなどの第三者の立ち合う、文化的・社会的な背景をもつ臨床の場を可視化し理解可能なものとして提示し、それぞれの関わり合いを問い直すうえで可能性をもつことが提起されている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文では、病院での医療従事者たちの活動、医療従事者と病者の関係、病者・病気体験者同士の関係、ボランティアとしての第三者の活動に関して、フィールドワークを通じて、その実態を調査して考察している。以下、評価できる点をあげてみよう。

第一に、現代医療の現場の諸相に、申請者自身がフィールドワーカーとして介在して、医療の担い手や受け手についてフィールドワークを行ない、エスノグラフィーを記述している。病院内での医療従事者の会合や研究会、事例検討会への参加、外国人医療サポートネットでの活動、不育症に関連するインターネット・ブログへの関与を継続して行ない、医療従事者の動向や外国人も含めた病者への対応ばかりでなく、病者や病気体験者同士の動向・意向、医療ボランティアの活動に関して、これまでの研究には見られない深く詳細な参与観察が可能となり、すぐれて臨場感に溢れたエスノグラフィーを記述している。

第二に、医療に関わる人々の内側に迫った研究であることである。医師や看護婦（看護師）といった医療従事者が、一般に閉鎖的で権威的だと考えられている病院という制度のなかで、自分たちの医療活動を捉え直し変革しようとする姿勢を明らかにし、これまでの硬直した医療化批判や固定的でステレオタイプ化された医療従事者の役割論を乗り越える研究となっている。日本社会でマイノリティとして生活する外国人が病気になり、医療の場面に直面した際に生じる文化的・社会的な摩擦の指摘、また医療と行政の側に対する外国人支援のネットワークの必要性の提言など、これまでの研究を進展させるものである。社会的に認知不足な不育症の体験者を研究対象としていることも同様に評価できよう。

第三に、フィールドワークに基づいたエスノグラフィーの記述は、アカデミズムの領域に留まることなく、医療従事者や病気体験者、医療ボランティアとの対話、医療の現場と研究との連携を目指している点をあげることができる。いわば社会的な貢献が強く意欲され、市民社会に向けた学問研究が志向されているのである。

本論文では、現代医療の諸相に関して、フィールドワークに基づいて分析されているところがすぐれている。だが、外国人も含めた病者や病気体験者、それに家族・近親者との関係について、かなり困難であるとはいえ、聞き取り調査を行なったなら、一層すぐれたエスノグラフィーとなったと思われる。医療は一様のもではなく、世界各地でも日本各地でも文化的・社会的に特異なものであり、そのような幅広い視野から比較する視点をもって、特異性を掘り下げていくことが、現代医療のエスノグラフィーを記述するうえで重要な課題として残されている。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていくうえでの課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。